

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

令和5年5月

長岡造形大学

はしがき

本書は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的として、令和5年3月17日に本学において博士の学位を授与した以下の者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位の種類	学位記番号	氏名	論文題目
博士（造形）	甲第4号	竹本 悠太郎	彫刻の＜実材論＞ —素材による作り手の思考とイメージの生成—

氏名	竹本 悠太郎
学位の種類	博士（造形）
学位記番号	甲第4号
学位授与年月日	令和5年3月17日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	彫刻の＜実材論＞ —素材による作り手の思考とイメージの生成—
論文審査委員	主査 遠藤 良太郎 長岡造形大学教授 副査 生井 亮司 武蔵野大学教授 副査 長谷川 克義 長岡造形大学准教授 副査 小松 佳代子 長岡造形大学教授

審査結果の要旨

提出された博士論文は、乾漆による人体彫刻制作者という立場から、素材との関係性においてイメージが生成してくることを<実材>を軸として論じたものである。日本における近代彫刻概念の成立経緯を検討し近代以前と対比的に論じつつも、素材とのやりとりという点では連続性があることを示す。乾漆の技法材料論としての麻布についての考察、さまざまな領域に「迂回して語る」方法論によって先人の作品や言葉を検討し、「かもしれない」という可能性を導き出すことで自らの作品を省察していく。自己の制作に即した探究でありつつ、「実材」とイメージとの関係から質的な時間について思索することで、合理性に支配された今日の社会に問いを投げかけるものとなっている。

提出された作品、「告ぐ」「謳う」「喚ぶ」の3点は、いずれも等身大以上の大きさを持ち、その成果物は愚直な作者の姿勢を物語っている。作品の完成度や制作者としてのオリジナリティの確立といった部分では課題を残すが、博士（後期）課程という環境と時間の中で充実した取り組みがなされた結果が形となったことを評価する。

博士論文・作品ともに、博士（造形）の学位を授与するにふさわしいと認め、合格とした。各審査委員の審査結果を以下に示す。

（主査 遠藤良太郎）

審査に際し、他の委員と共に作品と論文の比重のようなことについて意見交換した。概ね50:50というところで私は捉えることとした。論文は物質と作り手の思考とイメージを扱うものであるが、その前提として制作、作品、表現があり、その質とレベルは問われる。制作、作品、表現とは我々人間が他者と共有する新たな価値の創出のことである。どんなレベルの制作行為においてもそれについて深く語ることはできるだろう。しかし、ここで求めたいのは新たな価値をどのように作り得たかという質とレベルである。若い竹本くんアーティストとしての完成度を求めるものではないが、その制作の志向性、指向性、またそれらを試行していく中での質とレベルを問いたかった。

人体の具象像を見るとき肝要なのは、首と腰であるというオーソドクスな観点からみたときに気がつく独特のフォルムについて、意図有りかどうか聞いたがその回答と実際のズレがあった。像と台座の関係についても場との関係の大事な接面として問うたが曖昧さが見られた。これら2点はそこから派生する様々な要素と関係している。この点においてやや不足を感じた。竹本くんは近代彫刻をやりたいのではないと明言し、それがゆえに内面性を称揚することを抑制する。これが上の作品のフォルムに現れている。近代、現代において獲得、または獲得しつつある彫刻を批判し今日表現することとは何か。ある意味で技法材料論的としてのフィールドワーク的な麻という素材についての記述や、石牟礼を引きながらフィクショナルな表現のあり方についての記述も可能性を感じる。迂回し語るという方法も良い。以上を評価し審査の結果とする。

(副査 生井亮司)

論文においては、日本における近代彫刻の概念成立の過程を近代以前と対比的に論じることから、その基盤に内在する実材の意味を見出したことに意義がある。実材と作者との関係を自らも制作者である立場から考察することで、実材と長い時間をかけて関わることでイメージが生成すること、またそのイメージがどういったものであるかということを経験的に探ったことは、合理性に支配されようとしている今日の社会に問いを投げかけるものでもある。そうしたことから課程博士の論文に値するものとして評価したい。

作品においては、塑造技法、乾漆技法を用いたの大型の作品 3 点という意欲的な取り組みとなっている。申請者がこれまでに出会ってきた様々な彫刻、とりわけ近代以前の彫刻に日本的な美意識を見出そうと取り組んだ結果が現れている。作品の完成度や制作者としてのオリジナリティの確立といった部分ではまだこれからという部分もあるが、博士(後期)課程という環境と時間の中で充実した取り組みがなされた結果が形となったことを評価したい。

(副査 長谷川克義)

本論は、乾漆による人体彫刻制作者として、制作における素材との関係性および実材を軸とした自らの彫刻感を経験に基づき論じたものである。

研究については、「迂回して語る」という方法から先人の作品や言葉について思考し、「かもしれない」という可能性を導き出すことで自身の作品を省察しながら、近代日本における彫刻世界の成立についてその概念と問題を思索した。また、素材と表現の展開について、論者の専門分野である乾漆制作における試行で示しながら、彫刻制作者と素材との関係性を、素材と応答することによって進められる制作により作品が成立することを示唆した。そして「実材」という言葉とそのイメージとの関係から、量的な時間と質的な時間について思索し、実材との関連性を持った彫刻論の一つとして、ある独自性を示すことができたと判断している。

作品制作においては、「告ぐ」「謳う」「喚ぶ」の 3 点を提示した。各作品とも脱活乾漆によるもので、いずれも等身大以上の大きさを持ち、その成果物は愚直な作者の姿勢を物語っており好感が持てる。しかし、作品の造形感に物足りなさを感じるのも事実であり、今後を期待するものである。

(副査 小松佳代子)

提出された論文は、塑造による人体彫刻制作者である申請者が、自己の制作過程において感受している素材や環境からの影響、素材や技法との関係によるイメージの生成を明らかにしたものである。自己の彫刻観を明確にするために、近代日本における彫刻概念の成立経緯を検討し、そこで切り捨てられたものを現代の彫刻に接続し直す。その手がかりになるの

が素材である。乾漆に用いられる粘土や漆が表現に与える影響のみならず、漆や麻布をめぐる風土や生活にまで視野に入れることで、乾漆技法がこれまでの作り手が積み重ねてきた思考の集積であることを見いだしている。特に彫刻領域で用いられる「実材」という言葉に着目し、内外の彫刻家による「実材」観を詳細に検討したうえで、多様に解釈されてきた「実材」について、作り手に内的イメージを超えた新たなイメージを立ち上げる時間をもたらす素材であるという申請者独自の「実材」観を提出している。この点が本論文の白眉である。申請者個人の制作実感に基づきつつも、過去の彫刻家の言説、他の学問分野の研究、時に小説にまで「迂回して語る」という独自の方法論によって、人間が手で素材に触れてものを作ることの意味という普遍的な課題に迫る優れた論文であると判断する。

論文内容の要旨

私は塑造（乾漆）により人体彫刻を制作している。本論文では私の経験に基づき、彫刻制作者の思考と探究の一端を明らかにすることを試みた。近代日本彫刻が成立する以前にまで遡り、作り手のイメージと素材との関係について明らかにした。

本論文は、「序章 本論文の問題関心」を含む全7章から構成されている。

「第1章 本論文の特徴と方法」においては先ず、個人的な制作経験を研究として論じるための方法を検討した。ここでは本論文が、彫刻家に通底する思考の地平を探るために、私自身の乾漆制作の経験に基づき、他者の作品や言葉、人間の生活や歴史に「迂回する」という方法を取ることを示した。

「第2章 彫刻制作における素材の位置づけ」では、明治期の近代化がもたらした内面の発見に焦点をあて、近代日本彫刻史の整理を行った。作り手の「内」と、「外」なる素材を切り離す西洋的・近代的なものの見方は、工部美術学校での教育や高村光太郎によるロダニズムの受容を経て、日本人に浸透する。光太郎は、芸術家の個性や内面を重視する態度によって、「彫刻」を「人形」や「置き物」から区分した。ところが、光太郎の作品や詩の変遷を詳しく追っていけば、「彫刻」は「人形」や「置き物」と明確に分けられないことが見えてくる。そこでこの章では、塑造（乾漆）を軸に「彫刻」が「人形」「置き物」「マネキン」「怪獣」「フィギュア」と区切れないことを確認した。そして、「彫刻」と「人形」などの区切れなさは、それらが物質性をもつという共通項で結ばれていることに由来していることが判明した。

第3章からは、物質、すなわち素材を軸に置くことでどのような「彫刻」の姿が見えてくるのか、という関心に基づき考察を進めた。「第3章 素材からみる技法と表現の展開」では、乾漆制作における素材の一つである麻布をめぐる人々の生活や歴史の調査を行った。奈良時代の乾漆技法の発展には、漆や麻が自生していた日本の風土や、人々の生活様式が関係していた。その分析からは、素材や環境によって作り手の思考する範囲がつけられるという見解が示された。

「第4章 素材の働きをめぐる作り手の思考」では、素材に向き合うときの作り手の思考について考察した。粘土や漆を扱う私は、制作行為とは素材に応答することと考えている。素材の働きと制作行為が互いを補うかたちで彫刻制作にかかわっている。そのように考えると、素材との関係に相補性を見出すことで、作り手は何をしようとしているのだろうかという新たな疑問が生じる。そういった疑問に導かれて、ミケランジェロの作品と詩、夏目漱石の『夢十夜 第六夜』にみる運慶のエピソードを手掛かりに考察を進めた。素材の働きがある「〈かのように〉語る／騙る」ことで、作り手は、自分の内的イメージとは異なる規則をつくり出している。そして、その規則と自分とをどう合致させていくか思考することによって作品を作り出そうとするのであった。

以上の議論から得た見解をもって、作り手のイメージの生成に素材がかかわるプロセス

を、私自身の制作経験に基づき明らかにしたのが「第5章「実材」によるイメージの生成」であった。キーワードとなったのが、「実材」という言葉である。彫刻家の舟越保武は、「実材」について油断ならない存在と述べた。その舟越の作品と言葉へと迂回し、自分自身の塑造（乾漆）による制作を省察することで見えてきたのは、彫刻制作において「実材」に向き合う「時間」が、作り手のイメージの生成に深く結びついていることである。「実材」に触れる「時間」において思考することにより、完成へと向かって固まっていく作り手のイメージは揺さぶられる。既存のイメージが揺さぶられ隙間が生まれるからこそ、そこに作り手が思いもよらない異なるイメージが入り込む。こうして「実材」に触れることにより、新たなイメージが生成されるのであった。

「結章〈実材論〉からみる彫刻制作の可能性」では、作り手と素材との関係性を論じる本論文の意義について述べた。本論文では、近代日本彫刻の成立における問題を検討し、奈良時代にまで遡って、私自身の彫刻制作を省察した。文学や人間の生活や歴史にまで迂回することで考察をすすめる本論文は、人間が何かを作って存在するとはどういうことかという問題までを射程にしている。彫刻制作を近代彫刻のなかだけで考えていない射程の長さが、本論文が提示する彫刻論、すなわち彫刻の〈実材論〉の独自性である。

本論文が示した彫刻の〈実材論〉は、私たちが自己の内面に基づいて素材や環境を操作しているばかりではないことを明らかにした。私たちが自らの意図のみによって世界を眼差し、自分以外のものを操作するような、冷たい関係だけを生きていないことを示している。作り手のイメージと素材との関係を軸に彫刻を論じることは、人間と環境、人間と物質との関係に、あらゆる場面で不均衡がみえる現代を問い直すものである。本論文が提示した彫刻の〈実材論〉は、この意味において、現代への批判性を有した彫刻論なのである。